山岸文庫蔵『なくさみ草　麓のちり』解題・翻刻

奥田　勲　片岡伸江

本学山岸文庫には『なくさみ草　麓のちり』と題する写本（同文庫分類番号一三五―六三六九、江戸中期書写）を蔵する。正徹作『なぐさみ草』と、作者不明の紀行文『麓のちり』を合わせた冊子本で、表紙右上に山岸氏により「九条家本」と墨書されている。おそらく九条家旧蔵本を山岸氏が購入したものであろう。この写本におさめられた二書を調査した結果、この山岸文庫本『なくさみ草』（以下山岸本とも称す）は、現在までに紹介されている『なぐさみ草』（または『なぐさめ草』）の伝本とは別系統の本文であり、『麓のちり』も他に伝本を見ない新出作品であることが判明した。そこで、本稿では、この山岸文庫本『なくさみ草　麓のちり』翻刻本文を、略解題を付して紹介することとする。

Ⅰ　書誌

山岸文庫本『なくさみ草　麓のちり』は袋綴写本一冊。縦二十六・九糎、横十九・七糎。青純色楮紙の表紙で、左上に

題簽「なくさみ草 麓のちり」、扉題として「なくさみ草 麓のちり 正徹作」とある。また、『なぐさみ草』には翻刻に見られるように「なくさみ草」という内題が存するが『麓のちり』には内題・尾題ともに存しない。墨付二十八丁、一頁十二行書、一行に大略二十五字程度を有している。両作品とも同筆で、十六丁表より『麓のちり』が始まる。奥書・識語の類はない。落丁と思われる部分は特にない。

Ⅱ　本文解題

〈1〉　なくさみ草

この作品の伝本は、従来群書類従巻第三百三十四『なくさめ草』（以下類従本と称す）、早稲田大学図書館蔵『源氏哥少々なくさみ草』（同じく早大本）、島原松平文庫本『慰草』（同じく松平本）の三本が知られており、稲田利徳氏により、類従本と早大本は同一系統に立ち、特に早大本が成立当初の姿を伝え、松平本は別系統で後に作者自身の手が加えられたものとの見解が示されている。(注一) 稿者も、稲田氏の見解にほぼ賛同するものであるが、ここではそれら二系統の伝本と山岸本の関係について、校合結果を元に大まかに考察しておきたい。

まず、稲田氏により松平本系統の加筆が指摘された『源氏物語』に取材した連歌や和歌を例示した部分を、山岸・類従・松平本の三本について見る（松平本の本文は三浦三夫編『慰草（松平文庫本）』（昭和44、私家版に依る）。

〈山岸本〉

つかふ人にそはしたものあると云句に

初瀬ちやおなしやとりの中へたて

子としておやのいさめたかふなと云句に

夕霧の上に雲ゐの鴈なきて

これみな心をまはせると申ぬへし又彼物語の哥をとれる哥もありおく山の松の戸ほそをまれにあけてといふ哥を定家卿

足引の山桜戸をまれに明て花こそあるし誰を待らん

如此の事也一首を申さはなすらへて心え給ふへしなとかたり侍にさては不審はれぬさるにてもけふあすは世の中すゝしからぬほとにて（後略）

〈類従本〉

つかふひとにそはしたものある

といふ句に。

はつ瀬路やおなしやとりの中へたて

といふ句やらんに。

夕霧のうへに雲井のかりなきて

これ皆心をまはせりと申ぬべし。唯今おもひいだす計也。證歌いくらもありぬべし。又彼物がたりの歌をとれる歌もあり。おく山の松のとぼそを稀にあけてといふ歌を。定家卿。

足引の山桜戸を稀にあけて花こそあるし誰を待らむ

如此一首を申さば。なずらへてこゝろえ給ふべしなど語り侍るに。さては不審はれぬ。さるにてもけふ翌は。よの中

すゞしからぬほとにて。（後略）

〈松平本〉

つかふ人にそはしたものあると云句に

初瀬路やおなしやとりの中へたて

子としておやの義にそしたかふと云句に

夕霧のうへに雲井の雁なきて

さかなもとむる酒の盃とやらんありしに

梵灯

こゆるきのいそかしからてくらす日に

是みなこゝろをまはすと申ぬへきや忠今おもひ出るはかり也証歌いくらも有へし

又かの物語のこと葉をとれるかと覚る歌も有

定家卿

足引の山桜戸を稀に明て花こそあるしたれを待らむ

彼松の戸ほそをまれにあけての歌によれる哉亦後撰集に

俊成卿女

さけは散花のうき世と思ふにも猶うとまれぬ山さくらかな

袖ぬるゝ露のゆかりおもふにもなをうとまれぬやまとなてしこ此歌をとれるにこそなとかたり待るつゐてにさるにて

もけふあすは世の中すゝしからぬほとにて（後略）

山岸本は、二番目の連歌の前句を持つ分、類従本よりも整い、連歌の付合が二種類、和歌が一首で、松平本のような後ろ（「世の中すゝしからぬほとにて」）とのつながりが不自然になるような無理な補入はない。（ただ他本にある「唯今おもひいだす計也。證歌いくらもありぬべし。」の部分が山岸本にのみないのは、山岸本独自の整備ゆえか。）ここを見る限り、山岸本は松平本の改変以前の本文を有している。

ところが、旅中各所で詠まれた和歌の、詠出状況の説明部分のうち、類従本と松平本が相違する鏡山、犬上の里、黒田等の描写を見ると山岸本は松平本に近い。犬上での詠を見る。

〈山岸本〉

いぬかみとこの山いさや川なとみち行ふりに尋てそ見し

日数ふる花はちるともつもらしをありとやはらふ床の山風

いさや河いさや我名をもらすとも誰かはしらんしる人もなし

〔犬かみの名もしるく里ひたる犬とものの旅人にむかひておとろ〳〵しくとかむるもおかし〕

暮ぬまに人なとかめそ犬かみの里はありとも宿はからしを

山岸本〔　〕の部分は松平本には存在するが、類従本・早大本には見られない。鏡山・黒田の詠も、山岸本（松平本ほぼ同文）と松平本のみが以下のような記述を持つ。

〈山岸本（鏡山）〉

さるはやう〳〵老のねふりにやともおほゆ年へぬる身はなとなかむるほとありあけの月さしいてぬ

〈山岸本（黒田）〉

庭の木の本に卯花のほのかにさきたりときしりかほにおかしき夕に

山岸本・松平本は、類従本系統よりも、より詳細で物語的情緒をも加えた場面説明をしているといえよう。また、旅の童形との交際部分では、類従本・早大本に記されていた激しい感情の表白が、松平本において削除され、読者の目を意識し体裁を整えた形になったのであるが、この点でも山岸本は松平本に一致している。二人の交際について

をのづからぬれぎぬ立出る人も有べし。

恋敵の存在について

今一かたは少遠けれど。あはれしれる夕ぐれえんなるあけぼの。月の夜ひるまに言傳へていひかはすに。ひともしらずうき名もながれずと。ほのきゝはべるもうらやましく。さりとてひとにはわれしりがほにかたるべき事かは。天にくちなしといへども。ひとのいはざるはとくなるべし。（引用は類従本。早大本もほぼ同文。）

との不満の独白が、山岸本・松平本には全くないのである。更に、童形との交情が描かれた山岸本十一丁表から十三丁表にかけての本文は、松平本との校異はめだって少なく、類従本系統とは明らかに相違することを示している。

以上の検討から、山岸本も、成立当初の本文に加筆改変のあった後の伝本であると考えられる。その改変傾向としては、詠歌状況の物語的演出、童形へのあからさまな私的感情の削除が見うけられた。ただ、松平本と比較した場合、類従

本・早大本に従う部分も多く、類従本系統から松平本系統へと本文が性格を変えていく、その中間形態を示す伝本と位置付けることができよう。

その他、山岸本のみに見られる誤写（山岸本四丁表三行「みのゝ中山」は正しくは「みのゝ山中」とあるべき所。松平本に「みのゝ中山はなをひかし也」と記すのは、「みのゝ中山」と誤った山岸本系統の伝本を見ての補入とも考えられる）は、山岸本の本文の従来の三本の本文からの独自性を思わせる。稿を改めていずれ詳しく論じたいと思う。

〈2〉　麓のちり

『なくさみ草』と合綴されている『麓のちり』は、おそらく正徹と近い関係にある僧によって書かれたと思われる紀行文である。題名は、冒頭の一文の「遠き所はいてたつあしもとよりはしまりて二千里の月のまへにいたりたかき山はふもとのちりひちよりなりて三万丈の空のうへにのほりさるはかのふしの山見侍らまほしき事は……」とある箇所から取ったものであろう。『国書総目録』『古典籍総合目録』による限りにおいては、同名の書でこの紀行文の伝本を持つものは見当らず、新出の孤本である。

内容は、中世文人がよく試みた富士遊覧の旅行記であるが、富士見物後に鎌倉・下総国古川（古河）に足をのばしている。記述によれば、永享三年九月十四日夕刻に都を出立、垂井・墨俣・清洲等で知人を尋ね、駿河の国府で富士見物を果たして九月末日に島田着。三嶋で伊豆守宅に滞在、藤沢を経て十月十日すぎに鎌倉に到着した（日時は不審な箇所もあり必ずしも正確でない）。鎌倉から下総国に到り、黒髪山（日光男体山）の霊場参拝を計画した時点で年末となり、文章も途切れている。

筆者は、尾張国のりたけでは、正徹と交際深い畠山（右馬頭）持純に世話になっている。文中、正徹の『なぐさみ草』の旅に言及していることと合わせ、正徹と筆者との共通の交友圏がうかがわれよう。また、小野を通過中、「けふはかの

家の歌の会侍る日なりける都に侍らはその座にあらまし物を」とひとりごちており、冷泉家に親しく出入りした歌僧（文中「桑門」とある）でもあった。ただ、和歌は著名な古歌をふまえた通り一遍の作が多く、多用される対句表現も平凡で、特に文学的才能に恵まれた人物ではなかったようである。

なお、関心が持たれるのは、尾張国清洲に住む知人について「此十とせあまりがさきに徹公外書禅師この城中竹陰軒に座せられしついてに光源氏物語なとうかゝひ聞てをろそかならぬすき人」と述べている条である。「十とせあまりがさき」という年代把握は幅がありすぎ不正確であるが、この箇所は正徹の『なぐさみ草』の旅での源氏物語講読を明らかにさし、松平文庫本『慰草』末尾「応永廿とせあまり五のとし秋七月十八日尾張国清すの城中竹陰軒にしてしるす事しか也」とある記述が追認できよう。

（注一）稲田利徳「正徹の「なぐさめ草」の諸本と成立」（『岡山大学教育学部研究集録』第四十九号　一九七八・七）

Ⅲ　凡例

一、山岸文庫本『なくさみ草　麓のちり』翻刻にあたり、『なくさみ草』には、類従本、早大本、松平本との校異を付した。その場合、山岸本に存在する箇所に生じた校異は、山岸本の該当箇所を示した後校異を付し、山岸本に存在しない箇所に生じた校異には便宜上本文内に＊印を挿入して示した上で、＊印の後に校異を付した。諸本の略号は、群、早、松。

一、丁移りは　」の記号で示し、表裏はオ又はウとカタカナで示した。

一、原則として改行、字体は底本のままとした。

なくさみ草

いにしへやよひのすゑかとよねにかへりふるすをいそく[1]
花鳥の身さへ跡とむへきかたなくなりぬれはさそふ[2]
水のあはれむよすかにまかせつゝ都をさすらひいてゝ[3]
関のこなたまてまよひこしかなもとよりかゝる世すて
人はいつくかはこゝとさたむへき宿もあらましをすみ[4]
の衣の色あさはかにたゝえひすのすかたにあらぬはかり[5]
にてかうほりの鳥にもねすみにもあらさるかことく＊[6]
してあるひは玉の砌のたつときに＊のそみあるひは民屋[7]
のいやしきにいたりつゝ世のありさましたひきぬれは四十[8]
の波身にかゝるまて都のうちをさらぬことになりぬる[9]
なるへししかあれは四方の国のさかへ遠き里にはしれる[10]
[11]
[12]
[13]
[14]
[15]
[16]

」一オ

1いにしへ―三本いにし　2の―松ナシ　3とむ―群とゞむ　早松とゝむ　4いつくか―早松いつか　5の色―早松の　群ナシ　6たゝ―群て　7ひ―早び　8にあらぬ―松をのかるゝ　群にあらざる　早にあらさる　9かうほり―松かはほり　10さる―群早ぬ　11か―松ナシ　12＊―群早に　13して―松ならし　14＊―松に（ミセ消）　15世のありさましたひきぬれは四十の波身にかゝるまて―松ナシ

群世のことわざにしたがひきぬれば。四十年のなみ身にかゝるまで。早世のことわざにしたかひきぬれは四十年のなみ身にかゝるまて　16さかへ―群境

たつき[1]もなくして行末心ほそしともいひぬへし関の
岩かとけふそふみならし侍る
　心こそ跡にひかるれ旅人の駒たになつむ関の岩かと
志賀の浦はにうちいてゝみれはひえの大たけなからの
山たゝ此麓[2]にかすみにみえつゝ[3]きてそこ[4]はかとなく
けふりわたれる四方の木のめ[5]＊[6]春の嵐[7]になを雪と
ちりくる花も春をさそひかほに浪のうへにちりしき
たるまこと[8]にこき行舟の跡見ゆるはかりなり
　山風も桜はよきよにほの海に春行浪の跡[9]はありとも
もる山といふ[10]所はいたく心もとゝまらす森のかけの一むら
里にて市女あき人の物さはかしきのみなり時雨も
いたくなとおほゆるもいまは時ならすや[11]　」一ウ

1き―早ぎ　2に―三本の　3みえ―三本ナシ　4そこはかとなく―群ナシ　5＊―三本の　6春の―群早ナシ　7になを―群早より　8まことに―松まま　9跡―三本花　10と―早なと　11や―松ナシ

君か代に身こそもれぬれもる山の下葉残らぬ春のめくみを[1][2]
こよひはかゝみの山ちかくやとりとりぬならはぬ旅にや[3][4][5]
おもふかたの夢をたにみすさるはやう〳〵老のねふり[6][7]
にやともおほゆ年へぬる身はなとなかむるほと
ありあけの月さしいてぬ

鏡山春の旅ねの有明に月も老ぬる影そかすめる[8]

むさの宿とかやを過てゑち川にかゝり侍に道のかたはら
にけしき木たかき杉むらにかう〳〵しき鳥居なと[9]
たてるあり小田かへすしつのおにとへは老その森といふ*け[10][11]
に四十年のさか*くるしきみちなれはしはしうちやすみつゝ[12][13][14]

名を聞も袖こそぬるれ今は身にかゝる老その杜の下露[15]
いぬかみとこの山いさや川なとみち行ふりに尋てそ見*し[16][17]

」二オ

1君か代に―松露なから　2を―松に　3の―松ナシ　4とり―松ナシ　5旅―三本旅と　6を―群早ナシ　7みすさるはやう〳〵老のねふりにやともおほゆ年へぬる身はなとなかむるほとありあけの月さしいてぬ―群早もなし　松みせさるはやう〳〵老のねふりにやともおほゆへし年へぬる身はなとなかむるほとあり明の月さし出ぬ　8そかすめる―早やかすまん　9に―群ナシ　10たてー早まて　11*―群早に　12*―三本も　13しはし―早しは〳〵　14す―松ナシ　15ゝ―群は　16ふ―早ふ　17*―群早侍り　松侍

日数ふる花はちるともつもらしをありとやはらふ床の山風[1]
いさや河いさや我名をもらすとも誰かはしらんしる人もなし
犬かみ[2]の名もしるく里ひたる犬ともの旅人にむかひ
ておとろ〳〵しくとかむるもおかし
暮ぬまに人なとかめそ犬かみの里はありとも宿はからしを
＊[3]されことなるへし[4]小野といふ所を過るに古冷泉[5]新大納言
為尹卿は和哥[6]＊[7]道[8]の長者にていませしかとも時うつり世
くたれるにや[9]此道＊[10]すたれはてぬるを三[11]とせはかりのさきにて
侍しやらん内大臣[12]家より千首の哥＊[13]たてまつらしめ給ふ
へきよしおほせられたりし[14]に述懐の哥の中に
いかにせんをのゝ山柴ことたえ[15]て猶たてかぬる宿の煙を
おほけなき身[16]のねかひにはあらしかしいつかむすはん細川の水」二ウ

1ちる―群松塵　早ちり　2犬かみの名もしるく里ひたる犬ともの旅人にむかひておとろ〳〵しくとかむるもおかし―群早ナシ　3＊―群早なと　4なるへし―群早になりぬ　5古冷泉新―群故新早故新（コシン）　松故冷泉　6為尹―早為尹（タメノマサノ）　7＊―群早の　8道―松ナシ　9くたれる―群くだりぬる早くたりぬる　10＊―三本も　11三とせはかりのさきにて侍しやらん―群ナシ　12内大臣家―早内大臣家（當御所シンケ）　13＊―早松を　14たりし―三本たる　15え―早ら　16き―松む

あふみのをのゝ庄[1]はりまの細川は和哥所の永領にて
五条＊[2]三品[3]よりかはらさりしかとも道のおとろへにしたかひ
て武家[4]のはんせいなといふことゝ[6]やらんになりつゝ家の
風もよはり＊[7]さまなるを此ついてにきこえあけたまひ[8]
けるなるへしそのとしの冬かとよ＊[10]細川[9]の庄をかへしつけ[12]
られてやかて小野をもいまかたつかたわたさるへしなとの[13]
御あらましありときこえしまことによろつをめくみ[14]
給御心[15]さしかたしけなくうけたまはりし也時の管領
右京兆[16]入道殿[17]より旅行[18]にそへて歌[19]をつかはさるゝ贈答[20]な
と＊[21]ありしをこなたかなたよりつきたてまつりしかとも＊[22]
かたちもおほえすなりぬやかて正三位[23]の大納言[24]にあかり
なとし給て和哥の道を二たひおこし給かと見しほと[25]

」三オ

1庄―早庄（シヤウ）　2＊―三本の　3三品―早三品（俊成卿也）（ホン）　4武家―早武家（フケ）　5はんせい―群わむせ井　松わんせい　6ゝやらん―群早ナシ　7＊―群行　松早ゆく　8たまひける―松給ふ　9かとよ―三本かの　10＊―松かの　11の―群ナシ　12つけられて―群早つかはされて　13いまかたつかた―群早ナシ　14く―早ぐ　15給―群松給ふ　早給　16右兆京―早右京兆（細川法名道歓）（イウケイチウ）　17入道殿―松ナシ　18旅行―群知行　早しぎやう　松施行　19歌をつかはさるゝ―群早ナシ　20贈答―早贈答（ソウタウ）　21＊―群早の　22より―群松取　早とり　23＊―群歌の　早哥の　24三―早松二　25の―三本ナシ

にあくる年の春の花の夢にさきたちて雲ときえ
かすみとへたゝり給[1]にしこそあはれにかなしかりしかいま
このてすさみ[2]にかきくはへ侍るにつけても懐旧[3]のなみた[4]
水くきにそひ侍るかなすりはりをこえしにそ都の山も[5]
かくれはてぬる[6]

今はゝや目にもかゝらす古郷の都の山は雲かくれつゝ
はんはさめかひなといふ所より[7]＊山ふ[8]ところなる里つゝきに[9]
て水のなかれ心ほそくときは木[10]にみとりそへたる若葉[11]
のかけ[12]こくらく[13]松の藤浪岸の山吹えもいはぬはるを
のこしかほ也[14]

岩ねもるし水に春の面かけをとめてやかへる松の藤波
こよひは山中にとゝまりぬやよひの末なれ＊[15]とも所からにや　」三ウ

1に―群松ナシ　2み―松ひ　3も―松ナシ　4の―松のの（ミセ消）　5に―松ナシ　6かな―群なり　7は―早ば　8か―早が　9＊―松は　10ふ―早ぶ　11木―早ぎ　12け―早げ　13く―早ぐ　14か―早が　15＊―早なれ

山風＊[1]なをあらましくそゝろさむき心ちして夜[2]もす
から火なとたきあかしてまとろます[3]

春なからいふきおろしは夜さむにてま柴折たくみのゝ中山[4]＊[5]
関の藤川あさわたりして不破の関につきぬ[6]
昔たにあれぬと聞きし宿なからいかてすむらんふはの関守[7]
野上といふ所は里もかすかにしてうかれめもなし青野か[8]
はらに出たれは国のさかひはるかに南のかたはる〳〵と山も[9]
みえす[10]
命あらは花にかへらん春草の青野か原をけふは行とも[11]
すのまた河はみのおはりのさかひとかや河岸にうちのそみ[12]
たれは舟はむかひにあるほとにて時うつるまてなかめゐぬとは[13]
かりありて里の子のせりかなにそとかたみにつみもちたる[14]
「四オ

1＊―三本も　2夜もすから火なとたきあかして―群ナシ　3まとろます―群早まとろまれす　松ナシ　4ふ―早ぶ　5中山―三本山中　6＊―松みのの中山はなをひかし也　7て―三本つゝ　8の関―三本ナシ　9つきぬ―群つく　10と―群など　早松なと　11して―群ナシ　12春―群青　13さかひ―早さかへ　14河―群ナシ　15なかめ―群誘ひ　16子―早こ　17の―群ナシ　18そ―群か早ぞ　19と―三本ナシ

三四人おきなの老かゝまり＊[1]なとそのりくして[2]きたるわら
はへの舟よりおりかね侍を子[3]にやむ[4]まこにやたすけ[5]おほ

し*[6]てわれもいみしうくるしけなるもなにとなくあは
れにそ見侍し水鳥ともの河すにむらかり*[7][8]ゐたる
いとおもしろし
　舟人も*[9]子を思ふ道[10]そ水鳥のすのまた河は浪心せよ
あしかをよひなともおなしやうにこえ過ぬくろたといふ[11]
所にいにしへみとりこのほとよりみつわくみ*[12][13]し人の今は
まことのおやのよすかにてありと聞し道より*[14]尋へき
家のやう人[15]にとひなとしてあないし*[16][17]たるにかきりなく
きゝよろこひつゝさるはおやめく人も都にあるほとなりし
をわかき心にとかくいたはりなくさめなとしつゝ*[18][19]ふるにたつき[20]」四ウ

1*—三本たる　2く—早ぐ　3子—早こ子　4むまこ—早むまこ孫　5おほし—三本おろし　6*—群早なとし　7か—早が　8*—松て　9*—群猶早なを　10道そ—群早ナシ　11も—松ナシ　12みつわくみ—群はぐくみ　早はくゝみ　松見はくゝみ　13*—群早に　14*—三本も　15家のやう—群所　早ところ　松家ゐのやう　16人に—松ナシ　17*—松にミセ消　18つゝ—群あり　19*—早松あり　20き—早ぎ

いてきぬる[1]心ちして都の物語*[2]してあけくらし[3][4]侍しも
あはれなりかくてやう〳〵[5]卯月になりぬこの所のさままへ

もうしろも田面にて林は軒[6]ちかくいさゝむら竹めくれり
民の家所〳〵＊[7]かやか軒[8]あしのかきほさへさなから夏その
かけ[9]にかくされよもきむくらに門をとち[10]たり都よりあつま
へ行か＊[11]ふ旅人のすくる道[12]のつゝきもたゝこのかきほのほか
なれはむらか[13]りとをる駒のあしをとも物さはかしきおり
もあるへしわさ田におりたつ田子のこゑ〳〵[14]にうたひ夜
はかはつの耳か[15]しかましなとめつらしき心ちそ[16]せし
庭の木[17]の本に卯花のほのかにさきたり[18]ときしりかほ
におかしき夕に

よもすから光はみせよむは玉のくろたの里にさける卯花　」五オ

1ぬ—松た　2＊—群早なと　3て—群早つゝ　4あけ—群明し　5かくて—松おもひ立ぬれはあつまの果まてもとおもひしかとも爰にとゝめられつゝ　6軒—松斬　7＊—松に　8軒—松斬　9け—早げ　10ち—早ぢ　11＊—松よ　12道のつゝき—群堤の道　早つゝみのみち　松道のつゝみ　13か—早が　14にうたひ夜はかはつの—松ナシ　15かしかまし—群かしがましき　松かしかましき　早がしかましき　16そ—早ぞ　17木の本—群早木下　松木のした　18たりときしりかほにおかしき夕に—群早たるを　松出たるときしりかほにおかしき夕に

すみ染のくろたの早苗取しつや夕をかけて袖ぬらす

らん

此所はふかき哥枕なと[1]＊よめる歌みえすくろた河はあれと[2]
もみのゝ国とかやたつぬへし都の風のたよりにこなた[3]
かなたより文なとことつて侍るにあはれしるはかりの哥[4]
なともありしかともわさとかきつけすつれ〳〵なるまゝに[5]
ちかき寺に地蔵のおはしますにまいり老僧のむかし物[6]
語するなとにかたらひよりて日をくらすをこのたのもし[7]
くおもひつる宿もりさへとみの事とて京へのほりにし[8]
かはすへてしれる人もなしさらはまつこれより伊勢の[9]
かたへと心さして太神宮に参詣し侍しそかし道[10]
すからのひなのなかち[11]＊おとろへしありさまはあまのたく[12]
なはなか〳〵しけれは心しつかに又かきくはふへし十日[13]

」五ウ

1ふかき—三本ふるき　2＊—群早にも　松に　3つ—早づ　4ことつて—群言傳て　早ことつてゝ　松ことつけて　5るに—三本し　6も—松ナシ　7と—早ど　8つけ—群早いれ　松入　9地蔵のおはします—群おはします地蔵　早をはします地蔵　10まいり—松参る　11に—群ナシ　12を—群ナシ　13く—三本人と　14れ—群早ナシ　15まつこれ—群こゝ　早まつこゝ　16に—松ナシ　17の—三本ナシ　18か—早が　19ち—早ぢ　20＊—三本に　21か—早が　22つ—早づ　23くはふ—群候

あまりにてもとの所へかへりきぬかくて＊[1]たつきなきにて[2]
あかしくらす卯月の下の四日れいの御堂[3]にまいり
たるに夕つかたなれはにや人もいたくまいらす燈明かゝく
る人もなく不断＊[4]香のけふりもかすかに心ほそし此仏
の御事は都にてもきゝつたへたてまつりしにいにしへ[6]
はあゆみをはこふ人もおほく御堂のかさりもきら〳〵[7]
しかりしとかや明徳[8]の比いくさの庭[9]になりて＊[10]かたもなく
なりぬるとそ人の語[11]し世中の盛衰[12]＊[13]ほとけの御うへ
にもいましけりとあはれになん正面の東の間に心し
つかに念珠しゐたるに年[14]のよはひ六十[15]にちかゝらんと
みゆる翁すかたのかみ[16]＊[17]しろくいたくからめきたるかこまの
しろき色の衣[18]にきなるほうしひき入てする[19]二また[20]

なる　」六オ

1＊—群早も　2き—早ぎ　3の—松ナシ　4＊—三本の　5も—群早ナシ　6は—早ナシ　7つたへ—群侍　8ゆ—早松よ　9さ—早ざ　10明徳—早明徳（メイトク）　11庭—群ば　12＊—三本より　13と—松ナシ　14の—群早も　15盛衰—早盛衰（シヤウスイ）　16＊—三本は　17年のよはひ—松ナシ　18六十—早六十年　19ちかゝらん—群ちかかるらむ　早ちかゝるらん　松ちかゝむ　20か—早が　21＊—群ひげ　早松ひけ　22色の—群早ナシ　23ほ—早ぼ

かせ杖にかゝりつゝ庭の灯[1]爐のもとに立てうちおかむ[2]
あり此あたりにてはみなれすあやしうもろこし人なと[3]
にやと思ひなから念珠しはてゝ御堂よりおりてなに[4]
となくあゆみちかつきてみれは都にてたひ〳〵あひたて[5]
まつりし優婆塞なりさるは年久しくして一心の本源[6]
明也とかやいまたかひに手をうちて大咲すさるにても[7]
いかにとしてこゝにはいますにかととひ給にみやこよりうか[8]
れ出しやうあら〳〵こたふひなのすまひのならはす[9]
して*いかにしてかなとなのめならすとふらひ給にかつう[10]
れしき心ちすこゝにてことつくへきにあらされは此旅[11]
のやとりにいさなひつゝかへりきてかたらひ暮すされとも[12]
つたなき身のありさまもとより学せされは一文につう[13]

[14]

1灯爐―群灯爐　早ところ　松と丶ろ（灯炉）　2うち―群早ふし　3みなれ―群早みならは　4なと―松ナシ　5ちかつき―早ちかづき　松ちかへつき（ミセ消）　6ひ―早び　7たてまつり―松みて　8さるは―群宗旨の志ふかく。處々参禅の　早宗旨の心さしふかく處丶参禅の　松宗旨の心さしふかく処々坐禅の　9明―早明（アカ）　10大咲―早大咲（タイセウ）　11と―三本ナシ　12いますにか―群住か　13とひ給ふ―松とふ　14より―三本を　15＊―三本は　16してかなと―松やと　17とふらひ給―群訪ひ給　松とふらはれ侍る　18へきに―群べうも　早松へうも　19されは―松す日も暮ぬさらはとて　20と―早ど

21学―早学（カク）　松学を　22文―早文（モン）　23につうせす―群二道を論ぜず

せす道心なければ＊[1]法門[2]の心をうかゝひしることもなし
たゝ一かうに世上の物語のみしてこよひは枕をならへて
いたつらにふしぬいかはかりかの心にも懺愧[3]ありけんと
はつかしかりきされはそれよりのちひたふるにそひたて[5]
まつりぬれはいまは中〳〵あけくれにつけて不善の心
をもかつうは病にをかされておきふしのわつらひあるをも[6]
かへりてあはれみ給らんと心やすくさへそ侍るその次の日[7][8][9]
より此人にさそはれたてまつる事ありて国の＊中なる[10][11][12]
やうの所にいたれりこゝは家ゐもさるかたにるいひろく
国郡[13]の政をおこなひ百姓[14]のかへりみ朝暮にすたれ
さりしかは門前市をなせるやうにて都のほかの心ち
もせす十日はかりや侍けんかゝる＊[15]非人の身にあまるまて　」七オ

1＊―群一句の　早一勺の　2門―三本文　3懺愧―早懺愧（ザンギ）　4されは―三本さるは　5そひたて
まつり―松此翁にのみうちそふことに成　6を―松と　7給―松おもはる　8さへ―群早ナシ　9
侍る―松おもひなりぬる　10たてまつる事ありて―群奉て　早たてまつりて　松侍る事有て　11国
―群田面　12＊―早松も　13郡―早郡（グム）　14百姓―早百性（ハクセイ）　15＊―群賤き　早いやしき　松賤しき

のめくみにあつかりなさけのかすを見たてまつる事かた[1][2]
はし申さは中〳〵かたはらいたくなんそれより此所にうつ
ろひぬこゝは玉ほこの道遠からぬほとなからさすかに人
音しけからす東には江川はるかになかれいてぬ緑竹[3]
浪をおほひて朝日影をうかへす南には真砂のやま[4][5][6]
ところ〳〵にみえたり松風夢をやふり夜＊月霜をか[7][8][9]
さぬるかとおほゆ西には野さはたえ〳〵に一むら里に[10][11]
つゝきあししけり＊ぬなは＊はひひろこれる池とめくれり[12][13][14][15][16]
をしかもにほとり＊こゝをすみかとせり＊ねくらとするかさ[17][18][19]
さきむらかれり蓮の花のみたれさきて此比おもしろし[20]
家ゐのさまはさなから山の中の心ちして万木四方に[21][22][23]
つらなり流水左右にたゝへたり岸たかくして又くたれり[24]　」七ウ

1のめくみにあつかり―早のめぐみにあつかり　松ナシ　2たてまつる―松侍　3いてぬ―群出て　早いてゝ　4を―群ナシ　5す―群き　松る　6の―三本ナシ　7に―群ナシ　8たり―群わたり　9＊―群早の　10に―三本ナシ　11たえ〳〵に―群だん〳〵　12＊―早。13＊はひ―群ナシ　早。14こ―早ご　15と―群北に　早きたに　16めくれり―群めぐり　17＊―群など　早なと　18＊―群堤の柳岸の杉むら〳〵しげりて　早つゝみのやなきしのすぎむらとしふりて　松つゝみの柳きしの杉むら年ふりて　19く―早ぐ　20の―三本ナシ　21家―松宮　22ま―松き　23の―群ナシ　24左

右―早左右（サイフ）

すゝの下道すゝろに遠しやくら[1]ありしゝかきあり
たやすくつは物のいくさをふせきしら浪のおそれあら[2]
せしとなりすへて弓の庭鞠のかゝりなとうちに[3]入て[4]は[5]
なをゆほひかなり[6]＊しんてん[7]＊にらうつゝきたるかたに[8]一
宇あり竹張[9]と号す補陀大士[10]のおはします[11]両方に
床あり江下旧参[12]の衲僧[13]をこゝにあつめて坐禅参
学をは[14]けまんと＊[15]此比夏中なれはにやさやうの人[16]も
こゝにはおはしまさゝりしかはかの翁なと両三人こゝを
しめたり予かて[17]いたしく経録[18]をあかめをくへき机[19]には
和哥の抄物[20]をか＊[21]さねふとん＊[22]座すへき床の上には枕[23]
をたつさへてよこたはりふせる[24]炎天[25]にたへすしてけさ[26]
衣をわすれ非時食[27]をほしきまゝにして酒にくの中

」八オ

1ら―松し　2たやすく―群暫　3せ―松さ　4なり―松なるへし　5に―群ナシ　6ゆほひか―群寛意　早ゆほ（寛ヒロキ心也）びか　7＊―松や　8＊―群の西　早のにし　9竹張と号す―群號竹陰　早号（カウス）竹陰（イン）と　松竹陰と号す　10士―早士（シ）　11の―三本ナシ　12江下旧参―群會下久参　早會下久参（エケキウサム）　松会下久参　13衲僧―早納僧（ノウソウ）　松袖僧　14はけまんと―松つとむとかや　15＊―群なり　早也　16人―

にたはふるこれのみにかきらす無懺放逸のとか[1]二六時
中にたふる事なししかれともよきをえらはすあしき[2]
をすてさる慈悲のあまりこれをことゝもし[3]たまはす[4]
ひたふる＊心にあはれみ＊給ふほとにかゝるなさけ＊[5]かけを[6]
たのむ木の本にて露の命秋[7]をまちかほなりかくて[8]
五月＊[9]なかはになりぬるに日いよ〳〵なかくつれ〳〵にてなに[10]
となく＊らうのかたに立いてゝしん殿の南おもてをかいま[11]
みすれは此ほと＊みもならはぬ俗人四五人わらはすかたの[12]
きよけにあけまきのほともたゝならぬ二人はかり見え[13]
侍に都おもひいてゝゆかしきに此らうの戸にいてき[14]
たる人にとひ侍しかは東のかたよりこしの国へまかる[15]
旅人の此あたり[16]にしはしとゝまるへき事ありてなんと[17]

1か―早が　2ふ―群松ゆ　3しかれ―三本しかあれ　4す―早ず　5したまはす―松せす　6＊松僧　17ていたしく―群たらく　早松ていたらく　18経録―群禅録　19机―早机　20抄物―早抄物（セウモウ）　21＊―松き（ミセ消）　22＊―三本に　23枕―群枕双子　早枕子（シンス）　松枕子　24つ―早づ　25る―群松り　26けさ衣―松威儀　27非時食をほしきまゝにして酒にくの中にたはふるこれのみにかきらす―早ひししきをほしきまゝにして酒（シユ）にくのなかにたはふるこれのみにかきらす　松ナシ

」八ウ

—松に　7＊—群はぐくみ　早はぐゝみ　松はてゝみ　8ほとに—松ナシ　9＊—三本の　10け—
早げ　11秋—群ナシ　12か—早が　13五—早五（サ）　14＊—群松の　15は—早ば　16か—早が　17にて
—松なるあまりに　18＊—松此　19＊—三本は　20み—群みえ　21俗人—群俗　早ぞく人（シン）　22わ—
松は　23か—早が　24け—早げ　25に—松なる　26て—早で　27あたり—松わたり

1こたふるに旅なる2人ときくも身にしられひなのなか3
ち＊4いかゝととはまほしけれとうちつけなる心ちして
此戸口より帰5きぬかくて過6行にある時此7あるし8の9
きこゆるやうさて10も光11源氏の物語といふ事＊12人13
にたつねしりたり14となんきゝをよひ15給ふ16る年久し
くなましひに連歌の道にすき侍に17しをある時は
世18事にさはりある時はすき19ことならすしてことは
の花色すくなく心のいつ20みみなか21みともしきのみ
にてちかくはこれをとゝまりにきさ＊22あれとも＊23物語の
ゆへ聞侍たきひ24まあらはかたはしにてもいかゝなとあり
予か25云26まことに連歌の道の事近年天下一同27
にこのことはさに28なりぬと也しかれとも先達みなうせ　」九オ

1こたふる—松こたふ　2なる—群早ナシ　3か—早が　4＊—群は　5き—群早ナシ　松さり

6過行に―群早ナシ　7ある時―松ナシ　8る―早る　9の―群ナシ　10て―早る　11光源氏―早光源氏　12＊―群早よく　松を　13人に―松ナシ　14り―三本る　15ひ―早び　16給ふる―群たまひぬる　早給ぬる　松給ふること有　17に―松ナシ　18世事―群世の中　早世事　19すき―早。すき。　20つ―早づ　21かみ―三本もと　22＊―三本は　23＊―群早この　24ひまあらは―松こといにしへよりのほいあり　25か―早が　26云―三本いはく　27同―早同　28に―群と

て彼道よこさまになりもてゆきつゝいまは風雅の
幽なるましろひにはあらす諍論のかまひすしきを
ことゝし侍とかやしかあれはましろひにくしさし
いてかたきことおほかるへし＊此事灯上人朝夕のう
らみにかたられ侍しなり予も若年の時もしも
まなひしる事もやと思ひ給しかとも生得＊不堪の
うへかやうのをそれあるによりて斟酌をくはへきさ
れとも老後の友さるへき物をや抑光源氏の物語
は五条三品入道釈阿河内守源光行等もつはら
これをもてあそはれけるとかや此人々＊より両流になり
て＊定家卿のあをひやうし河内守か本なといふことに＊
なりぬたゝいさゝか註を存せることのかはれるはかりか紫　」九ウ

1よこさま—群邪　早よこしま　松よこしま　2もて—群ナシ　3風雅—早風雅（フウカ）　4し—早じ　5幽—群直　早幽（イウ）　6は—群早ナシ　7す—松て　8ひ—早び　9し—三本たる　10＊—松と　11灯上人—松梵灯庵主　12の—三本ナシ　13に—群ナシ　14も—松か　15も—群早ナシ　16しる—群早うる　17ひ給—群ひ　18＊不堪—群の不堪　早の不堪（フカン）　19かやうの—群此　早この　20さる—三本たる　21物をや—群物かな　早物哉　松ことわさなるへし　22早品（ホン）　23河内守源光行—早河内守（カハウチノカミ）光行等（ミツユキラ）　24＊—松の後　25両流—群早ふたつのながれ　松二なかれ　26＊—群あるひは　早或は（イ）27ひやうし—群べうし　早へうし　松へうし　28＊—松し　29註—早注（チウ）　30せ—群松ナシ　早す31れ—松ナシ

式部かことの葉として藤氏の長者御堂関白殿[1][2][3][4]
御筆をくはへ給けるなりきはめて儀ふかく理はあさ[5][6][7][8]
し物語のこと葉ゝその時世にいひしれることをあり
のまゝにかきたりしかとも世すゑになり行は人のことは[9]
もしたかひてかはり侍にや今は人のなへてはしらぬ事[10][11]
のやうになりぬされとも和哥の道にはこと葉人の[12][13]
耳にたゝす心田夫のいやしきも聞うるやうにと[14][15][16]
こそ先達も侍れ殊更此物語は心の用ふかけれは[17][18]
これを心底にうかへはをのつから風骨となりて詞のほか[19][20]

に心さしをみえぬへきおやと愚意[23]に存[24]はかりなり
故伊与[25]入道了俊在世の時此物語＊[26]よみとかすしらさ[27]
る事のみおほかりしかは十余年か[29]ほとちかつき尋[28]

」十オ

1部—早ぶ　2ことの葉—松撰作　3藤氏—早藤氏（トウシ）　4御堂関白殿—早御堂（ミドウ）関白殿　5御—三本ナシ　6ふかく—松ナシ　7理—早理（リ）　8はあさし—群あさし　松あさきにてふかし　9と—早ど
10か—早が　11へ—早べ　12の—群ナシ　13に—群早ナシ　14心田夫—早心田夫（シンデンフ）　松田夫　15うる
—群早うる　松さる　16と—松ナシ　17先達—早先達（センタツ）　18用—早ゆふ（用）　19へは—早べは　松へ　20
風骨—早風骨（フウコツ）　21を—三本ナシ　22おや—群かな　早松哉　23愚意—早愚意（グイ）　24存—群松存る　早
存する　25故伊与—群故伊豫守　早故伊与（コイヨ）　26＊—三本の　27よみとかす—松よみとかれす　28さ
—早ざ　29か—早が

たてまつりしかともともとより心物[1]こと〳〵くと〻まらす[2]＊[3]
風の樹頭[4]にすくるかことしいはんや人なみ[5]に尺門[6]に
いりし後はさすかに人[7]めをかさる方[8]はかりにてもさ[9]のみ
こと〻する事なけれはかたのやうにもおほえすかた
はらいたき事おほかるへしとていなみ侍しかとも[10]
かたはらより[11]す〻めたまふ人なともありてのかれかたく[12]
してた〻つれ〳〵なるま〻にたか[13]ひのいとまをのみかきり[14]

につゝしりよみ侍るほとに此秋まてになりて[15][16]
やう〳〵＊はてぬへし＊彼註とてはしるせる物の一帖も[17][18][19][20][21]
なくつゝきをたにもおほえすして聞人よりもたと[22][23]
れるなりされともたちかへりしる人もなくひろく世の[24]
きゝみゝあるましきをかたことにていかに空ことおほく[25][26][27][28]

」十ウ

1心物こと〳〵く―群心はものごとに　早松心物ことに　2ゝ―早ゞ　3＊―群早して　4樹頭―早樹頭（シユトウニ）　5に―早ナシ　松を　6く―早ぐ　7か―早が　8さ―早ざ　9て―早つ　10て―松ナシ　11かたはら―群片端　早かたはら（ヲ）　12すゝめたまふ―松すゝむる　13か―早が　14のみかきりに―群かたり　早かぎりに　松かきりに　15ゝ―早ゞ　16て―早で　17＊―群事　早松こと　18＊―群早さるは　19註―早注（チウ）　20は―群早ナシ　21帖―早帖（チウ）　22も―群早ナシ　23と―早ど　24たちかへりしる―群立まじる　早たちまじる　松立ましる　25みゝ―松に　26し―早じ　27こと―群人　早うど　松うと　28こ―早ご

侍らんと我はつかしきかなまことやかの旅人の童形[1][2][3]
も連歌の道をたしなみ手跡も行末たのもし[4]
なと聞しにあはせてこなたに立いてゝたえすとひきゝ[5]
なとせられ侍に心はつかしくなむやまとうたの心もと[6]
なきをもつねにいかにそとあるにをろかなるこゝろの[7]

をよふはかりは物語しなとするほとにをのつからやう〳〵[8]
まめことをも＊[11]へたてなくなりつゝさるはかり[12]＊[13]のをのゝ[14]
ならしはのなれのみまされは和哥のうらはのすて[15]
舟もつゐにいかなるえにかひかれん[16]関守[17]のうちぬる[18]
よゐの月かけ＊[19]身をしる雨の夕暮をとふらふには[20]て
は夏衣かさねぬ夜はをうらみすかむしろなか[21]ゝらぬ
時をかこち侍ぬへしさはかり身を雲水にまかせ山林に　」十一オ

1と—群早ナシ　2旅人—松ナシ　3童形—早童形（トウギヤウ）　4も—群也　5つ—早づ　6もと—群得　7にそ—早にぞ　松ゝそ　8し—群ナシ　9をのつから—群早ナシ　10まめこと—群真　11＊—群あだ事をも　早あだことをも　松あた事をも　12つゝ—群行に。をのづからぬれぎぬ立出る人も有べし。早ゆくにをのつからぬれきぬたちいつる人もありぬへし　13＊—群場　早ば　松は　14をのゝ—群ナシ　15は—早ば　16え—群ところ　17ん—群早けん　18守—早守（モリ）　19＊—群早又　20はては—群をのづから　早をのつから　21か—早が

名をかくすへきほとならすともなにそは露のあたし心＊[1]
色にそむへきそやくつれたちなはまことに立田の川[2]
のにこり＊[3]すまぬ名をやなかさむとおもひかへすも＊[4]心の
もよほしなりや

涙川はやくうき名やなかれまし人めつゝみも朽あへぬまに[5]
とかこちぬへし

泪川あさきもしらすたのみきてうきたる名をや友になかさん
かくて＊しほやき衣なれぬれはある時はけはしき道に[6]
駒なへて行ある時は遠きなかれに舟のうちをおなし[7]
くす又ゆくゑなき野原の露にみしか夜の月をおしみ[8]
涼風＊暁にともなひて木の下やみのほたるをあはれむ[9]
あしたになれ＊夕にむつれて五月六月をゝくるある[10]

」十一ウ

1＊―三本の　2くつれたちなはまことに―群くつるたづなは　早くづれたちなは　3＊―群に
4＊―三本心と　5あへ―群果　早はて　6＊―群早猶　松なを　7ある時は―群あるひは　早あ
るいは　8駒なへて―早駒ナラヘテ也こまなめて　松駒なめて　9ある時は―群あるひは　早あるいは　10＊―
群の　11に―群早ナシ　12＊―群行　13五月六月―早五月六月サミナ

夜の月に河ちかくさそひいてゝ[1]
深にけりなかるゝ月も河波もきよすにすめる短夜の空[2]
此所をきよすといふなるへし彼哥に[3]
夏のよの月のきよすにすむ鶴の霜のふりはの色そ寒[4]
[5]
[6]
[7]

けき

みな月のはしめになりてあはれしらるゝ夕つくよに杉[9]の
戸口にやすらひてかりそめの物まうてとかやとて[10]
立帰あひみん中と思へとも世のならひこそさためかた
けれ
とあるをいなはの山のとたにとひあへすあはたゝしきほと也
かきりある命なりとも旅衣かへらんまての身[11]をやいのらん
みな月のつこもりにゆふにかきてし[12]のひて[13]
君かため神しうけよとみな月のみそきには[14]あらぬみそきをやせん[15]
返し
」十二オ
1月—松暁　2深—群松更　早ふけ　3に—松み(に也)　4いふ—群早申　5彼哥に—群彼歌　早かの哥
松童　6の—松は　7色そ寒けき—群早色のさむけさ　8の—群ナシ　9杉—三本まき　10て—三
本つゝ　11身をやいのらん(身をいのらん)—早我身ともかな　12のつこもりに—群御祓の日　早みそぎの日(祓也)　13ゆ
ふ—早ゆふ(シテ心)　14かき—松つけ　15しのひて—群早ナシ　16は—松ナシ

神に今うけよと祈るみそきこそうき瀬[1]しらるゝ契なり
けれ[2]
又衣てかれし夜をかさ[3]ぬる比かれ[4]より
よそなから音はかはらぬ松風をうはの空にや[5]人のきくらん

おもひなくさむもはかなしや[6]＊[7]返し

身の上に露をはかけきた[8]かゝたに今夜は松のねをかは

しけん

これ[9]のみならす＊[10]つ[11]らき嵐のこゑにしほれてなと夕くれ
をとかこち＊[12]待夜なからのありあけに鳴のはねかき[13]を
かそへ[14]みしか[15]夜の枕の上におもひねの夢をたとる[16]あく
るをつくるかねのこゑに夕をしらぬ契をうたかひ又[17]
うつせみのむなしきほ[18]とをなきくらし[19]夜は夏むしの
身をいたつらにもなす[20]ことをかなしみつゝ[21]夏も過秋に
も成ぬいとゝしく一葉ちる風のこゑに涙のたまをくた

」十二ウ

1瀬―松を　2けれ―群けり　松けり（れ也）　3か―早か（ムナシキ也）　4かさぬる比―群重て　早かさねて　5
に―三本と　6や―群早ナシ　7＊―群今一かたは少遠けれど。あはれしれる夕ぐれえんなるあけ
ぼの。月の夜ひるまに言傳へていひかはすに。ひともしらずうき名もながれずと。ほのきゝはべる
もうらやましく。さりとてひとにはわれしりがほにかたるべき事かは。天にくちなしといへども。
ひとのいはざるはとくなるべし。早いまひとかたはすこしほととをけれとあはれしれる夕くれゑむ
なるあけほの月のよひるまにことつけて言加ことかはすに人もしらすうき名もながれすとほのきゝ侍も
うらやましくさりとて人に我しりがほにかたるへきことかは天にくちなしといへとも人のいはさる
は徳なるへし　8たかゝた―早たからた　9これ―群早しか　10＊―群あるときは　早ある時は

11つらき嵐のこゑにしほれてなと夕くれをとかこち—群ナシ　12＊—早あるときは　13か—早が
14へ—群早ふ　15か—群ナシ　16る—三本り　17又—群早ナシ　18ほと—群早ね　松音　19くらし
夜は—群早ナシ　20も—三本ナシ　21つゝ—群ナシ

き二のほしのゆきあひにねかひのいとのこゝろをひく[1]
夕の空におもひつゝけて＊[2]
墨染に年ふる袖の色なれはかすともうけし天つひこ
こそのけふことはの露をみかきてし故をよそなるかちの玉つさ[3]
京へ文なとつかはし侍しついてなるへし筆を取て＊[4][5]
ほすひまも秋の一夜の天津ひれふかき涙と又やなら[6]
なとすさみ事もありし也かくてやう〳〵なけきなから＊[7]
月日をかさねきこのまゝ＊[8]ひたふるにしらぬ山路を尋て＊[9]
跡たえなまほしけれとももろこしのよしのゝ山にこもるとも[10]
なををくるへき心にもあらす後の世をなけく涙といひ[11][12]
なすともしほれん袖の色みえぬへしいかゝはせんとて又[13][14][15]
し＊るよすかと思ひ立侍るにかれ又こしの旅にいそく[16][17][18][19]

」十三オ

1か—早が　2＊—群手ずさみに　早手すさみに　3こそのけふことはの露をみかきてし友をよそなるかちの玉つさ京へ文なとつかはし侍しついてなるへし—群早ナシ　4筆を取て—松ナシ　5＊—群おなじ帋に　早おなしかみに　6ほすひまも秋の一夜の天津ひれふかき涙と又やならましなとすさみ事もありし也—群ほすひまは秋の一夜のあまつひれ古き涙とまたやならましなど。なをざりごともありしなり。　早ほすひまは秋の一夜のあまつひれふるき涙と又やならましなとなをさりこともありしなり　松ナシ　7＊—群早の　8＊—三本も　9＊—群早も　10な—松ナシ　11なを—群早ナシ　12いひなすとも(中略)つかふ人にそはしたものあると云句に—早ナシ　13しほれ—群しぼら　松しほら　14は—群ナシ　15と—群に　16＊—群れ　17と—群へ　松へと　18るに—松り　19又—群はた

日かすのまちかきをいへりある時か[1]の人のい[2]＊はくまことや
彼光源氏の物語は歌[3]にも連歌にも詞をとりて
心をとらすと云[4]人あり此事いかゝと予か云此物語
は心詞幽玄をきはむ[5]ことには和哥[6]＊難題連歌[7]の
つけにくきはふるき物[8]＊の心をまはす事一躰なる[9]へし
いはゆる生田[10]＊川の鳥のゐはといひしちのはしかきかき[11]
つめてと云かことし[12]源氏の心をよめる歌古来おほ[13]
し證哥空[14]におほえす[15]

後京極摂政殿[16]

白露のなさけをきけることのはやほの〳〵みえし夕かほの花

ちかき世には等思両人恋といふ題にて

故大膳大夫高秀[17]

あやにくに雲ゐの鴈のくる秋や落葉の露も袖ぬらす

らん　」十三ウ

1ましかき―松ましかさ　2かの人の―群かれ　松わらはの　3＊―松そ（ミセ消）　4彼―群この　5は―松そ（ミセ消）　6云―群申　7は―群ナシ　8＊―群松の　9は―松ナシ　10＊―群がたり　11なるへし―松也とかや　12＊―群松の　13か―松ナシ　14を―松ナシ　15空に―群所々に　16殿―群ナシ　17故―群松ナシ

如此なるへし又故陸奥守入道殿[1]

つかふ人にそはしたものあると云句に

初瀬ちやおなしやとりの中へたて＊[2]

子としておやのいさめたかふなと云句に[3]

夕霧の上に雲ゐの鴈なきて＊[4]

これみな心をまはせると申ぬへし＊[5]又彼物語の哥[6]

をとれる＊[7]哥もありおく[8]山の松の戸ほそをまれに[9]

あけてといふ哥を定家卿[11]

足引の山桜戸をまれに明て花こそあるし誰を待らん

如此の事也[12]一首を申さはなすらへて心え給ふへし[13]

なとかたり侍にさては不審はれぬさるにてもけふあす

は世の中すゝしからぬほとにてなやましかるへけれとも　」十四オ

1又故陸奥守入道殿―群故法音寺入道殿。勘解由小路殿。法名道将。早又法音寺三位入道　松又法音寺三位入道　2＊―群といふ句やらんに。3子としておやのいさめたかふなと云句に―群ナシ　早小野といふ句やらむに　松子としておやの義にそしたかふと云句に　4＊―松さかなもとむる酒の盃とやらんありしに　梵灯　こゆるきのいそかしからてくらす日に　5まはせる―群まはせり　松まはす　6へし―松へきや　7＊―群唯今おもひいだす計也。證歌いくらもありぬべし。早たゝいまおもひいだすはかりなり證哥（セウカ）いくらもありぬへし　松忠今おもひ出るはかり也証歌いくらも有へし　8哥―松こと葉　9＊―松かと覚る　10おく山の松の戸ほそをまれにあけてといふ哥を―松ナシ　11定家卿―早定家卿　民部卿権中納言俊成子也　12如此の事也一首を申さはなすらへて心え給ふへしなとかたり侍にさては不審はれぬ―松彼松の戸ほそをまれにあけての歌によれる哉亦後撰集に　俊成卿女　さけは散花のうき世と思ふにも猶うとまれぬ山さくらかな　袖ぬるゝ露のゆかりおもふにもなをうとまれぬやまとなてしこ此歌をとれるにこそなとかたり侍るつゐてに　13の事也―群早ナシ

此物語の哥をなんうつしとゝめて[1]見侍たきかた[2]〳〵[3]と筆

とりなむやとあるにいなみ[4]かたくしのはるへきふしには
あらすともかくはかりわかき心にすける人も世にあり
かたくなりぬれはいとゝしくす[6]ゝめ侍[7]たきことそかし[8]
とかゝ[9]まほしけれとも鳥の跡を[10]もてにきえ水くきのな
かれうたかたにあらし[12]をとおもひたゆたひ侍しかとも[13]
よしや筆の海はあさくともふかき心さしはみえぬへし
とこれをかこ[14]とにてしるし侍[15]る也ぬきか[16]きの哥は所々
に[17]おほかるへ[18]きをさやうの本もなけれは歌はかりをと
思侍なから[19]あまり行末[20]しりかたきこと[21]あるへけれは或
彼[22]物語の＊[23]ことはをひろひあるひは十か[24]一の心をあら
はしてしるしつけぬもとよりや[25]まひをもき身に

」十四ウ

1とゝめて—松ナシ　2たき—群たく　松はや　3かた〳〵と—群かう〳〵も　早から〳〵も　松
からからも　4み—群び　5か—早が　6すゝめ—群早すゝみても申　7侍—松ナシ　8そ—早ぞ
9かゝまほしけれとも—松おもひなから　10をもてに—松空しく　11か—早が　12し—早じ　13と
も—早ども　松と　14かこと—早かこと（加言）　15侍る也—松侍りぬ　16か—早が　17に—早ナシ　18る
—群ナシ　19か—早が　20行末—三本にゆへ　21ことある—三本なる　22彼—松後　23＊—松空（ミセ消）
24か—早が　25やまひ—早やまう

いとゝしきあつさ＊[1]も一かたならすみたれ心にてわかみる
中にたにひか＊[3]ことおほく侍かなよく〳〵なをしつけて[4]
うるはしき手あらは＊[5]きよめ＊[6]られさふらふへし＊[7]
　忘しよわするなとたにことのはにいはぬを残す水くきの跡[8]
　いきて世にめくりあはすはいく秋かむなしき空の月にうれへん
　はかなしとみるに涙もうかふあはのうたかたきゆるもしのうらなみ[9]
さてもかやうのあたことともかきつけ侍るをかたはらいた[10][11][12]
くはゝかりなきにしもあらすしかはあれとも此源[13]
氏＊[14]の哥さうしのおくにことはりを一筆のせてと[15][16][17]
のそみのあるにまかせて筆をとり侍るつゐてに[18]
都よりうつりかはりし＊[19]ありさまね覚のなくさみ[20]
くさともなりぬるをおほえすしるし侍なるへしいま[21]　」十五オ

1＊—松を　2中—三本うち　3＊—群める　4つけ—松ナシ　5＊—群かならず　早かならす
6＊—群松かゝせ　早からせ　7＊—松と也　8に—群の　9はかなしとみるに涙もうかふあはの
うたかたきゆるもしのうらなみ—松ナシ　10た—早だ　11と—松ナシ　12を—群松事　早こと　13
は—早□　14＊—群物語　15さ—早ざ　16ことはり—松言葉　17筆—早ふで　18の—三本ナシ　19
＊—群早身の　20み—群早め　21なる—松ナシ

はかの心さしにはあらす丙丁童子につたへ侍へし[1][2][3]
應永廿とせあまり五の年秋七月十八日しるす[4][5][6]
ことしかり＊[7][8]
かくはかりなくさみ草のたねよりも[9][10]
いかてさくらん物おもひの花＊[11]

」十五ウ

1丙丁童子—早丙丁童子（ヒヤウチヤウトウシ）　2に—松にそ　3へし—松へき　4廿—早廿（ハタ）　5五—早五（イツ）、　6しるす
—群これを書　早これを書（カク）　松尾張国清すの城中竹陰軒にしてしるす　7り—群なり　松也　8＊
—早山陽陰士（花押）　9み—群松め　10も—群早は　11＊—群花洛清巌山科正徹卅八歳　敷嶋の
道をつたへてひさしかれ千代のしら菊松のよろつ代

遠き所はいてたつあしもとよりはしまりて二千里
の月のまへにいたりたかき山はふもとのちりひちより
なりて三万丈の空のうへにのほりさるはかのふしの山
見侍らまほしき事はたゝあらましのみにてすき侍
しを此ころあやにくなる心にもよほされ侍て永享
三とせの秋九月十四日夕つかたになりてそ都のうちを
はいてはなれ侍しあふさか山にかゝるほとおもへは霧

なへたてそとなかめをこさんふる郷人もなしまして
旅の空にはことかはすへきともゝ侍らす
　こえ行くは猶しる人も長月の秋風はけし関の岩かと
けふはまつ都ちかく旅ねもせまほしくて
のほりおほちなる所にとゝまりぬ　」十六オ
　おもひやれ旅ねも今夜初霜の置まよふ秋の草の枕に
たれをかこつともなき心あてなるへしつとめて大津の
浜にうちいてゝみれはひらの山しかの海霧わたりて
そこはかとなきに漕ゆく舟ともまことになにゝ
たとへんとみゆ
　秋霧を吹おろすひらの山風に舟路やまよふしかの浦人
あはつのはらをうち過て石山寺にまうつ圓通大士のち
かひの海をはさることにてかのむらさき式部かこの御
堂にて書けるなる六十巻のことはそいたりふかう
おもひいて侍し
　水くきの跡をそしたふ紫のゆかりもふかき海をなかめて
人にかり侍し馬なとをはこれより返してせたのなか
はしかちよりそうちわたる　」十六ウ

ふみならす駒こそなけれかち人に哀はかけよせたの橋守
野路のゝ原くさつのすくも過ぬもる山にかゝるほと
雨すこしうちそゝく
衣手はぬるともゆかむ守山の下葉のこすな露も時雨も
みかみのたけをめにかけてやす河をわたれはまことに
いく瀬ともおほえす里ちかくなりては市かり屋なと
うちならへて人の音なひもいとらうかはし
すみ捨し我身ひとつや里人の渡る浮世をやす河の水
篠原といふ所をみれはつゝみの霧遠くそひけ
むらのけふりほそくのほれり田夫は黄柳のかけをたの
み野人は青松の本をしめたりといへともはか〳〵しく行
客のたちとまるへき屋とりもなしかゝみのすくにゆきぬ
れはくれはてぬ十五夜の月はなやかにさしいてたるも
所からかとみれはなをたゝならす
あかすみん都の夜はの面影もさらぬ鏡の山のはの月
あくれはよこせきむさなといふところも過ぬ道のかた
はらに大きなる鳥居ありとへは諏方の明神お
はしますおいその森と云なり

」十七オ

杜となる木〻もおいそのそのかみや諏方の御やしろうつし
ゑち河四十九ゑんなとも過ぬいぬかみをは行過て床の　そめけん
山いさや河なとは尋見侍りぬ
床の山よゝへし水のみなかみをとへともいさや川風そ吹
哀にもたかねし床の山こえて我宿ならぬ道いそく　らん
和哥所の永領をのゝ庄をも過ぬけふはかの家の　」十七ウ
歌の会侍る日なりける都に侍らはその座にあらま
し物をわれをはおもひいつる人も侍らしとをしはかり
思ひ出る都の人に我身けふこえぬとつけよをのゝ山風
すりはり山をこゆれははんはとかやさめか井といふ所
をみれは木のした水ひやゝかになかれて岩ねのしら
きくさかりにひらけたり仙家に入ぬるにやと覚て
ひそかに吾を老彭に比す
旅人もむすはゝこゝに千世やへんきくさく秋の山の井の水
しつくもあかぬ心ちして此みきはのやとにあかし侍つ秋
霧とともに立いて侍れはあつさかはらなといふ所は行
さきもみえす嶺の猿ともをよはひふもとの鹿妻を
こふ思ひいと切也かしは原と云所より秋の雨しのにふる　」十八オ

立ぬるゝ木の下露のやとりをもたれかかしはか原そ過行

美濃の山中こえ過て関の藤河うちわたる年老た

る関守をみるもかしらの雪いとすさまし

もりわひて幾秋風を身にしめき人もふりぬる不破の関哉

野かみといふ所はいたうあれて人里もなし

みすしらぬ昔の里の跡ふりて秋の野かみと今そ成ぬる

たる井といふ所にいさゝかたつぬへき人ありて立よりぬ

けふはここにやすらふほとに出すなりぬ此上なる山はみのゝ

を山なりときくもたくひなき身の心ちす

うかれきぬみのゝを山の待人もあらしな我身友なしにして

明る日のひるいてぬあを野かはらあか坂の宿くいせ川

なとも過ぬすのまたといふ所にしる人あり此家にとゝま

りぬいなは山を見わたせは松は霧間よりほの〳〵見え

たるにかりの一行こえてゆくなとそ旅の空になみた

すゝむここちし侍し

天津鴈誰か待とてか秋の田の稲葉の山を越て行らん

此まへなる川こきわたれは尾張の国とかやあしかおよひ

なといふ川ともゝ過ぬくろ田一の宮なとをもすくれはある(ママ)い

」十八ウ

は原のすゝき澤のあし征馬のあゆみをさまたけあるひ
はむらの竹岡の松行人の心をやしなふおり津をも過
てきよすといふ所にいたるこゝにあひしれる朋友ありたつ
ねよりてそのいにしへの事をもこの比のめつらかなるふし
をもたかひにかたりつゝくるほとに日も暮ぬ此所のある
しは前筑前守なる人なりけりたのもしき人にて尋
よれる朋友も都よりこゝにうつりすみてもろともに
旅のやうにこそは此家ゐとてもをろそかに侍れと
なにかはくるしきとてまねき入てひなの長路の行末
の事まてこまやかにとふらひなとす又しる人そ侍り
けるこれは此十とせあまりかさきに徹公外書禅師
この城中竹陰軒に座せられしついてに光源氏
物語なとうかゝひ聞てをろそかならぬすき人なれは
われをさへあはれと思ひ侍るにやあまたかたらひ人侍る
まゝにうちいてん空もわすれて三日はかりやらん
とゝまり侍つこゝもとちかくのりたけといふ所あり
右馬頭持純領せらるゝ所なりゆく末の乗物なとの
事此あつかりのもとへ申くたされしかはさやうの事

」十九オ

」十九ウ

をは申つかはしてそてうし侍しさてあつたの宮に
まうてゝおかみありけは社頭はしん〳〵として神ます
かことく海上まん〳〵としてほとりなきにたる夜に
入てこのたかき神殿よりみれはこきいつるあまを舟
ともいさり火の影にしるくみゆるにさむくして
浪を宿とひとりくちすさみて

いさり火もかすかに成ぬはるゝ夜のほしさき遠く出る舟人

山田庄といふはみちのつゐてにはあらぬをかならす
きたるへきよしかのあつかり申をこせしほとにかく
ふりはへ侍るつかひをひとり返し侍らむもねむなかる
へうおほえしかはかしこへゆくにこゝは此比民の服せ
さること侍てみたりかはしとてたか田といふところに
まちとる石たて木うへなとして心ふかうすみなせる
家のうちにきはゝしくさへそ見えしその日はとゝまりて
夜ふかくたちいて侍りかの山田のたちをすくれはやくら
かいたてなといふ物ともかまへていときひしけなりしかは
なをおとろき侍ぬにやあらむあたりちかくなくもきこゆ

もののふの山田のを鹿暁の弓張月にいまそなくなる

」二十オ

はるけき野原を分ゆけは露のみそきら〳〵とみえし
　露ふかき秋の野鹿の有明に月をそわくるしの〻めの道
人々なるみのうらちかくをくりてうちかへる名残いとさひ
しくて野辺のす〻むししほひの千鳥をのみそ
たひのともかともき〻侍し　」二十ウ
　なるみ方友なし千鳥秋風のさそふいつくに浦つたふらん
てんかくかくほくつかけなといふ所をすきて三川の八
橋にゆきつきぬむかし在中将こ〻にいたりてかれいま
かなひなとしけるあとなれはあはれもふかくおほえし
かとも心はとまるへき所にもあらす分ゆく道はさ〻の
くまのむつかしけなる中にていかなるひまにかあらん
けふあふ人もなし心あてなる木すゑを目にかけてゆく
ほとにやはきといふ所にいたりぬ左衛門佐持有の政
所けいしなる人のもとをたのむやとりとす暁おきい
て〻みれは空は月ほそくして山は風すさまし旅の
おもひ秋のなさけとりあつめたる心ちしてしは〳〵なかめ
侍つ　」二十一オ
　おとろへぬ空行月もあまさかるひなの長路のなかき夜ことに

分てこし野への松風旅ねする此里までや夜寒成るらん
日たけて此所をいつ山中あか坂なといふ所をも過ぬわた
うつとかやいふ跡より雨あらくふりて旅人おほく行
とまる立やすらふうちに日も暮侍しかはこゝをやかて
一夜のやとりとすあしを垣にしかやを軒とせり雨は
よゝともるねん床もなきにそ古郷の草庵おもひ出侍し
　我庵やいかにもるらん草結ふ枕も跡も露そあらそふ
やう〳〵あけ行ははれまなき空にたちいてぬいまはしの
すくおほ岩の関なとも過ぬみやちの山をはあとにし二
むら山をはかたはらにすたかし原ときこゆるは三河と
遠江とをかけていとはるかなりゆき〳〵て直下と見おろす
三嶋眼前にあり五湖脚下にありしほみ坂といふは
これなりけり都より富士みにくたる人おほくはこれより
かへりのほるなるにけふは雨なをそほふりて見え侍す
これも天吾にあたへさるならむかし
　をろかなる目にはをよはぬ山とてやふしの高ねも雲うつむらん
此坂をくたれはしらすかとなり民屋はなきさにつらなり
漁舟は奥にたゝよへりはまちを過行は山と海とのあい

」二十一ウ

たにしてむはらからたちいとしけし北には尾上の杉はる
かにおひくたり南にはすさきの松遠くむらかりいてたり
橋もとのすくに行きつきてとゝまりぬれは浪は夢をやふり
風ははらわたをたつうれへさま〳〵なり

野へといへは尾花の浪に袖ぬれて海さへちかき旅ねをそする　」二十二オ

はまなのはしを打わたる明ほのにひかしのかたをみれはしろ
くあらはれたるや彼たかねなるらむ人にとはてもしるかり
けりすへてことのはもをよひ侍らすつちはふめとも心は
空なるやうにて行ほとにいかなる所〳〵をか過けん
ひきまといふ所にいたりぬてんりう川にゆきてみれは
舟まつほとの旅人はにしひかしの岸になみゐたりこき
よすれは所もなくあらそひのる池田のすくと聞しは
あれはてゝ跡もなしさきさかこゆれはみつけとそいふ国の
あつかりをしる人にしてこゝにいたりぬ明ぬれはなを此所に
とゝまりてちかき寺のうしろなる山にのほりてみれは四方の
梢はくれなゐにして富士はたゝ雪のみなりのほり
たるやうにみゆ

染てほす秋の錦の色もなし雪にやあかぬふしの山ひめ　」二十二ウ

此やとりをもいてゝゆくほとにかけかはにつ坂なといふ所も過
ぬ円位上人の命なりけりとよめるさよの中山けふ
そこえ侍る
　又もこえん道はあれともいにしへの人そかへらぬさ夜の中山
きくかはかなやなといふ所をも過てしまたといふ所にとゝ
まりぬ秋はこよひはかりと思ふにもゆきやらぬ旅の空に
日かすはこよなうもつもりけりとおとろかる
　たよりなき我みを旅の中空にをくらす秋のいつち行らん
おほ井河朝わたりすれはいつしか秋のかたみにや紅葉
そ水にかつうきたる
　水上の山は嵐にあらねとも紅葉なかるゝ大井河哉
ふちえたをかへなとも過ぬうつの山にかゝれはつたの下みち
そ猶秋の心ちする
　うつの山こえけん秋も色にのみ心や染しつたの下みち
まりこてこしなといふ所をも過てするかのこふにいたりぬ
こゝには友とする人あまた侍て日をへてそやすらひ侍
し国のあるし上総介範政の亭にもゆき侍ぬこの二
とせかほとれいならすわつらひて歌なとにとりむかふへき

」二十三オ

心ちもし侍らすとていとさう〳〵しけにおもひ給へり
ふしみ侍らむとてことさらにつくられたる閣ありかれ
にのほりて
　あふきみつよにはたくひも中空に山とし高き富士の白雪
しつはた山木枯の森もほとちかくみゆ
　おりかけししつはた山のから錦立名もつらし木枯の森
これよりなをあつまなるかまくら山の名たかきをも見侍ら
まほしき心つきぬしかはあれといとたよりなきによりて
ためらひ侍しかともともとより縁にまかする桑門なり
草衣木鉢の資粮はいつこにしてかともしからさりし
たゝ心のゆきあしのおもむかんをこそはかきりならめと
おもひてひたふるに出侍るみちすから又めつらかなり
えしりいほはしなといふ所を過て清見か関にやすらへ
は夕陽浪にうかひてみほの松原はみとりくれなゐ
にゑいすとみえていとおもしろし
　わたの原とよはた雲のみほの松さすや夕日に塩風そ吹
清見禅寺なとしつかに見ありきておきつといふ
ところにゆきとまる

」二十三ウ

」二十四オ

うつ波をしはしたゆめて古郷の夢かせこよひ奥津しほかせ
をとに聞しさた山もこえぬゆゐかんはらなとも過ぬ
ふし川もわたりぬしもかたといふ所にとゝまり侍れは
夜もすから風寒くふいて目もあはす
聞捨し都の嵐日数へて身にしむふしの山おろしかな
浮嶋かはらにうち出てたれはこの原中は三十里なといふ
もやう〳〵あつまちの心地すきせかはひのつめの橋なと
いふをうちわたれはいつの国とかやみしまにゆきつきて
まつ社檀のほとりにのそめはあけの鳥ゐ玉のさかき
今さらなり御前の池にわたせるはしに中嶋の紅葉
ちりかゝれるなとまことにくれなゐあらはすとみゆ
さゝ浪をからくれなゐにおりかけて松風わたる池の木のもと
此御やしろちかくこ濱といふ所あり大弁天童おはし
ますかしこの岩のはさまより清水おひたゝしうなかれ
いてゝ此里にわさとせき入たるやうにみゆ
里分てなかるゝ清水なれはこそゆわもるあるし一夜宿かせ
たちよるへきたよりありて此国の守護ところにいたり
ぬあるしやかてなつさひむつひてよろつかたらひきこゆる

」二十四ウ

ほとにこゝに五六日とゝまり侍きあすとてのこよひ十六日の月きよくさえたるをふけすくるまてなかめてさしむかふ

旅衣かたしく袖にこほる也都のつとにいさよひの月

あくれははこね山にかゝるあし河といふ所をは過て彼寺のふもとにとゝまりぬ入堂参社のためなりきその砌にのそめは神社はいと神さひて僧房はことゝにきはゝしまへには湖水湛々としてかたはらには土峯巍々たり深更にいてゝみれはたちまちの月いとしろくして天と水とわくかたなし

水のえにあらぬ物から浦嶋かはこねの海そ月にこほれる

あかつきかけて立いて侍しほとにはたもとゆもとなといふ所をは月に乗してこえはてぬをた原よりはまさこちにして山をはうしろにす大いそひらつかなといふ所をすくこゆるきのいそはこのわたりならんかし浪風あらき日なれはあまのめさしも目に見えすさかみ河うちわたりふところ嶋をもゆき過つ

ふち沢に日をへてやすらひ侍しうちに月次の哥の

」二十五オ

」二十五ウ

會ありき暁の時雨といふ事をを〳〵よみ侍しに

あかすなを月をめくりて山かつら影もはなれぬ村時雨哉

当座は　野夕霰　寄道祝

夕されはすそのゝ原に吹おつる山風はやみちるあられかな

かしこしなよゝにつたはる我国の御法のをしへ敷嶋のみち

神無月十日あまりの比かまくらにいたりぬまつ若宮に

まうてゝおかみたてまつれはいかきはひろく社檀はうつた

かうして玉のはしをわたりいしの階をのほるうしろの山

には猪鹿所をえまへの池には鳧鴈床をしめたり南に

むかひて二の鳥ゐありうちなるは池のみきはにあり外

なるは海のなきさにたてりこれをゆゐの濱といふ霜月

の初卯にあたれる日は今夜陪従なとのゝしるかく旅

なる身にて此礼黄にあへる事よろこはしうおほえ

てその場にあかす物の音月にすみ松のひゝき霜に

さえたり庭火のもとより榊葉おり返しうたふあさ

くらになるほとことさらにわすれかたきふしなりきゑ

かう申きこゆる砌物ふりてことに神さひたる廻廊

たつ所にやすらひて見めくらせは海は冬かれの木の間に

」二十六オ

みえてこゝろあらん人は春秋の山の気色よりもめとゝ
めつへし巨福と瑞鹿の両寺に入てみれは岩ほを
きりて霊崛をつらね山をうかつて寶閣をならへ
たり逢春閣得月楼なときこえしはいまはなし
天津橋といふのみそむかしのまゝに侍なるかゝる所に
幽をさくり隠を甘て晩風に吟夜月に嘯らむ人の心
をろかなる身にもゆかしうそおほゆるやすらふやとりは」二十六ウ
山のうちのほとりなりしに前陸奥守　憲直　同淡路
守　憲家　あひともにあはれみたまふ事こけの袂
にはつゝむへくも侍すさるによりていつとなく日ををくる
ほとに冬も半過ぬ月次の会侍し三首歌に
行路雪
　里人のかつふみ分る跡をさへ空よりうつむけさの雪哉
夜千鳥
　しほみては浦のとまやのよるの夢みし跡したふ千鳥鳴也
松経年
　名にたかき雲ゐのつるか岡の松しらすいくよのねくらなるらん
つねに当座なとも侍しかともさのみかきつけ侍るへきにあら」二十七オ

すかたはしさへかたはらいたくこそかやうにいそく所もなく
うかれありくまゝに月もたちなんとすさるにても都こそは
古郷ならめとやう〳〵おもひたち侍る所に下総国古川と
いふ里にをのれをしれる人侍りこのわたりはむかしおとこ都
鳥にことゝひしすみた川の河かみなり室のやしまの煙
をも見かてらゐなかのすまひをもたつね侍らすはねんなかる
へきよしせうそこせしかはれいのつよからぬ心はえひきぎらて
又かしこへくたり侍らむとす陸奥守よりもあないしれる人
とてそへ給ふさふらへと駒うちなへてむさしのにかゝり小野
路といふ所にゆきくらし侍つ

むさしのや霜と雪との下草を枕にむすふ夜はの寒けさ

」二十七ウ

霞の関いるま川も過ぬ此あないしれる人につけられて
すくろといふ所にいたりぬ

又やみむすくろの薄雪消てもえいてん春の野への明ほの
こゝを朝立てちうてうといふ所にゆきとまるこれも猶
むさしのゝうちとかや

あつまちや道の白雪消やらてむさしのにさへふる日数かな

かまくらをいてゝ四日といふにこの所こかにいたりぬあるし待

うけてよろこふ事まなはんもをろかなりをとろへぬる旅すか
たなとあらためさせ侍るにわれにもあらす成ぬところのさ
まをみれは川は北より南へなかれたるに人の家はにしひかしの
きしにかすをしらすゆきゝの舟人こゝをとまりとせり水の心
のとかにして浪の音もかまひすしからすふしあさまつくは
うすゐなといふ山とも四方につらなりてしかもほと遠し

おもひ入人しもあらしつくは山は山しけ山雪ふれるころ
あさま山あさけの空に雪はれて行末たかくたつ煙かな

」二十八オ

ある人のいはくこの所にみえたるは日光山なりくろかみ
山と古人のよめるは彼山のことゝかや

ふりかゝるくろかみ山の白雪も日の光にやなをあたるらん
この御山いつるゆわふねなときこゆる霊場をもおかみたて
まつるへきをとしもすてにくれ侍りぬれはあはたゝしきやうに
おほえてあらたまらん春をまつことになりぬ

春のくるかたそときゝしあつまちに
ことしをくらす旅の空かな

」二十八ウ

（表紙）

（「なくさみ草」冒頭）

（「なくさみ草」末尾）

（「麓のちり」冒頭）